

課題

※G・ジョン・アイケンベリー『リベラルな秩序か帝国か』第1章「アメリカ覇権の起源を再考する」の課題です。

覇権安定論などリアリズムの理論によれば、第二次世界大戦後の国際秩序はアメリカという覇権国が形成したものということになります。そして、そのような国際秩序は国際公共財として機能するにしても、基本的には、アメリカの国益を最大化する秩序であるとされています。

これに対し、本章でアイケンベリーは、「現在の国際秩序はアメリカが主導して形成したものではあるが、アメリカが当初望んだ姿のものではない」（意訳）と指摘しています。しかし、それ故にかえって、現在の秩序は冷戦後も崩壊することなく維持可能なものとなり、アメリカもまたその恩恵を受けている、というのがアイケンベリーの主張です。アメリカは短期的な妥協と引き換えに長期的な利益を確保した、と言い換えることができるかもしれません。本章（の前半）では、そのような妥協（挫折）の例として、ITO 憲章、NATO（いわゆる「招かれた帝国」論）、マーシャル・プランの問題などが挙げられています。

一方で、NATO、マーシャル・プランなどについては、ヨーロッパをアメリカの市場とし、かつドルを基軸通貨にすることに貢献した（アメリカの利益そのものとなった）という指摘があるのも、事実です。ITO については、確かに GATT という形に一時は縮小されましたが、結局は WTO となってアメリカがほぼ望んだ形に現在はなっています。

上記の総括を踏まえて、「覇権安定論」と「アイケンベリーの主張」のどちらに妥当性があるか、安全保障、貿易、金融、その他の面から考えてみてください。